

# 海面養殖における水産用ワクチンの現状

## 1. 現況

近年、海面養殖魚へのワクチン投与が急速に普及しつつあります。なかでも注射ワクチンの投与尾数はここ数年で急増しています。

当初、注射ワクチンは、魚に一尾ずつ注射する労力が大きいため普及するかどうか心配されていました。しかし、連続注射器を用いた接種技術の普及により使用量は飛躍的に伸びてきました。

写真1に示したように、養殖業者の方々は作業台や手順を工夫されており効率化が図られています。



写真1 ワクチン接種風景

また、注射による魚へのストレスや作業への安全性が心配されていましたが、平成13年度は魚の死亡事故および人への接種事故等の報告もありませんでした。

次に、鹿児島県のワクチン投与尾数を図1に示します。

平成13年度から養殖ブリの主な疾病である連鎖球菌症とピブリオ病用の2種混合注射ワクチンが導入されたことや、今年からはカンパチやヒラマサ、シマアジ等の魚種に対しても注射ワクチンが承認され、対象魚種・対象疾病の拡大により今後も需要が伸びることが予想されます。

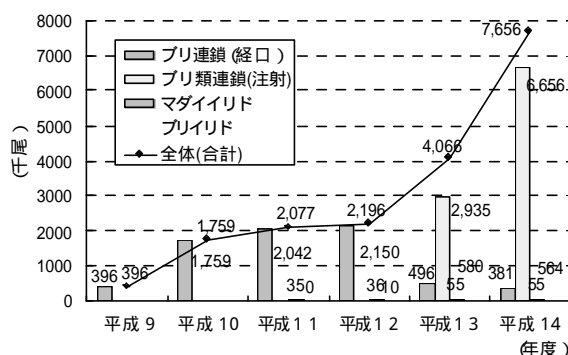


図1 鹿児島県のワクチン投与尾数

## 2. 効果について

ワクチンの使用量が伸びたのも、その効果が高いことの裏付けと考えます。

県水産試験場が行った調査では、平成13年度は8割以上の業者が有効であったと回答しています。

効果の継続期間については、連鎖球菌症用の注射ワクチンでは6ヶ月以上持続するとの実験結果があります。また、実際の養殖現場では1年以上持続するとの声もありますが、ワクチン投与後の飼育環境によっては効果に差が出る場合もあるようなので、過密養殖を避けるなど、引き続き適正な飼育管理を心がける事が大切です。

## 3. 消費者に対して

一般消費者にとっては、魚に対するワクチン投与はなじみが薄く、特に魚への注射行為にはイメージ的に違和感があるようです。

種苗導入時に接種されたワクチン液は稚魚期のうちに魚体内から無くなり、接種後1~2年で出荷する魚への残留の心配はありません。むしろ、ワクチンの効果で対象疾病にかかりやすく、抗生剤等の使用を抑えられます。

今後は一般消費者に対してワクチンに関する正しい知識を普及していくことも大切だと思います。(生物部 平江)